

# 盲ろう者が就労実現に至るまでの過程

—就労を実現している 2 事例の TEM 図作成を通して—

○河原麻子

林田真志

（独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所） （広島大学大学院人間社会科学研究科）

KEY WORDS: 盲ろう、就労、情報保障

## I. 目的

盲ろう (deafblind) は、視覚と聴覚の双方に障害がある状態を指す。「平成 24 年度盲ろう者に関する実態調査報告書」によれば、我が国における盲ろう者数は約 1 万 4 千名程度である。これまで、彼らを対象とした教育・福祉の充実に向けた研究がなされてきたが、未だ社会参加を実現するための制約は少なくない。

本研究では、社会参加の一つの形として就労に焦点を当てた。上述した報告書において、「日中の過ごし方」として「就労（正職員または正職員以外）」を選択した者は 114 名であった。彼らの就労の実態についてはいくつかの論文で示されているがその数は些少である。

本研究では、盲ろう者 2 名が、どのように就労実現に至ったかを事例的に明らかにすることを目的とした。

## II. 方法

1. 協力者: 就労している盲ろう者 2 名を対象とした（それぞれ A, B とする）。A は先天的に聴覚障害があり、14 歳の時に視覚障害を受障した。視力は右 0.02、左手動弁、聴力は左 103dB、右 102dB である。コミュニケーション方法は接近手話や口話法、顔の前に文字を書く空書き等を用いている。職業は理療業である。B は先天性盲ろう者である。推定視力は両眼とも 0.01、聴力は 90dB 程度である。コミュニケーション方法は、触手話や指文字を用いている。2. 調査期間: 202X 年 7 月～11 月。3. 手続き: インタビュー・ガイドを元に、半構造化面接法によるインタビュー調査を実施した。なお、インタビューは、新型コロナウイルス感染症対策の観点からオンライン上で実施した。4. 分析方法: 複線経路・等至性モデリング (Trajectory Equifinality Model: 以下、TEM とする) (サトウ・安田・木戸・高田・ヴァルシナー, 2006) の分析手法を用い、TEM 図を作成した。5. 倫理的配慮: 調査協力の任意性、個人情報の取り扱い、及び結果の公表形態について文書により説明し、同意を得た。なお、広島大学大学院教育学研究科倫理審査委員会の承認を得た上で実施した。

## III. 結果

以下では、語りを「イタリック体」、執筆者が命名したカテゴリーを【明朝体 (太字)】で示す。

### 1. A の TEM 図

全 12 回合計 18 時間程度のインタビュー（トランスビューを含む）の結果、総合文字数 7,042 文字の逐語録が作成された。逐語録を 98 の発言に切片化後、時系列に並び替え、TEM 図を作成した。

A は 1 度離職しており、2 度就労経験があった。2 度目の就労に至るまでの過程においては、合計 10 回の分岐点が見出された。以下では過程の一部について触れる。【**チラシで急募を見つけ**】た分岐点では、常に自力でチラシの求人情報を確認していたことからマッサージ会社 C の急募情報に辿り着いた。結果的に不採用だったことについて「重複障害だから」「ダメもとで (応募した)」と語った。【**ろう学校文化祭に参加**】した際には、偶然出会った理療関連会社 D (以下、会社 D) の社長に、母親が A の話をしたところ、その場で社長にスカウトされ、初めての就労に至った。

た。2 度目の就労に至った過程では、【**生活訓練を受け**】たことが分岐点となった。生活訓練実施機関の職員とともに、専門機関を通して求人情報を入手した (Fig. 1)。

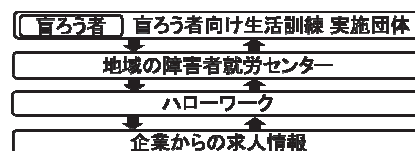


Fig. 1 A が求人情報を入手したプロセス

### 2. B の TEM 図

全 6 回合計 9 時間のインタビュー（トランスビューを含む）の結果、総合文字数 8,681 文字の逐語録が作成された。逐語録を 98 の発言に切片化し、A と同様の手続きで TEM 図を作成した。

B は合計 4 回の分岐点を辿った。そのうちの 3 回は、特別支援学校高等部、大学、大学院における進路選択の場面であった。その他の分岐点は、大学在学時に【**実習を受けるか検討**】したときである。その際には、家族からの理解や盲学校の教員からの助言やアドバイスを受けながら納得できる道を選択した。【**大学院在学時に進路を検討**】した際には、盲ろう者に興味がある人物や機関に焦点を当てて就職活動を実施した。その際にも、盲学校時代の教員から就労先への働きかけがあった。

## IV. 考察

### 1. 求人情報を入手した過程

①A が新聞の折り込みチラシから求人情報を入手した過程、及び②地域の障害者就労センターから求人情報を入手した過程は、雇用者が提供していた求人情報を盲ろう者が入手した過程である。①において、A は拡大読書器を使用し文字情報を入手できたことから、自ら求人情報を入手できた。また、常に求人情報を確認していたことも求人情報を入手するために不可欠であったと考えられる。②の過程における複数の専門機関を介した情報提供体制は、その他の盲ろう者においても有効である可能性がある。

### 2. 就労の機会が生み出された過程

A が会社 D との出会いがきっかけで就労に至った過程や、協力者 B が関係者に相談しながら就労に至った過程においては、予め求人情報があったわけではなく、盲ろう者本人の就労を希望する意思と、その盲ろう者をよく知る者からの協力の相互作用により、就労の機会が生み出されたと考えられる。

盲ろう者が就労を実現している職種は未だ些少である。このように新たに生み出された就労の機会の事例をさらに収集し、職域開拓を進めていく必要があると考えられる。

### 主要文献

サトウタツヤ・安田裕子・木戸彩恵・高田沙織・ヤーン＝ヴァルシナー (2006) 複線経路・等至性モデル—人生往路の多様性を描く質的心理学の新しい方法論を目指して。質的心理学研究, 5, 255-275.

全国盲ろう者協会 (2013) 平成 24 年度盲ろう者に関する実態調査報告書。

(KAWAHARA Asako, HAYASHIDA Masashi)